

第3章 歌う在宅療養者 脊椎損傷者の在宅生活

八木 大斗 (C班)

小笠原 都子(C班)

1. 調査概要

われわれは、在宅療養におけるエスノメソドロジーの調査を目的に、1回のインタビューと2回のビデオ撮影を行った。本章では2011年6月23日と8月5日のビデオデータを中心に分析を行う。

2. 調査対象の概要

今回調査させていただいた対象者(以下F・Tさん)は、70歳で要介護度5の女性である。27歳のときにバイクの後部座席に乗っていて事故に遭い、頸椎損傷から下半身不随となる。数年の入院の後、31歳のときに在宅療養を始めた。同時に自宅を改築し、フローリング化と外出用のリフトを取り付けた。F・Tさん宅は2階建てで現在は2階で飼い猫とともに生活をしており、1階はカラオケ用の部屋(二重窓の防音仕様)となっている。この1階の部屋では2年前までカラオケ喫茶の営業を行っていた。営業を終えた今でも友達を呼んで週末にはカラオケを楽しんでいる。基本的に、終日ベッド上の生活だが、移動するときには電動車椅子を使用している。車椅子には3時間ほど続けて乗ることができ、遠出の場合はバッテリーを所持していく。通院以外にもよく散歩や買い物等の外出をしており、そのときはリフト付きの自動車を利用している。

脊椎損傷のため、体温調整に困難がある。したがって暑さや寒さに弱く、体調管理に配慮が必要である。元は1階で生活していたが暑さなどの理由で風通しのよい2階に移った。手首が動かしづらい。特に左手がそうである。膀胱カテーテルをつけており、ベッド上では寝返り時に管が引っかかってつぶれてしまって、排尿困難にならないように、ラップの筒に管を通してある。2階の部屋には、このような小さな工夫がたくさん存在していた。F・Tさんは、下記の表1のような形で、訪問看護とヘルパーを利用している。またそれらとは別に固定された家政婦さんを2人(以下Tさん、Iさん)長期間(21年間と7年間)雇っている。

表1 . F・Tさんが利用するサービス

		曜日	時間帯	内容
訪問看護		火・水・土	9:00～10:00	褥瘡ケア、散歩、シャンプーなど
ヘルパー		月・火・水・金	8:30～12:00、 16:00～19:30 1	掃除、炊事など日常生活面を主にサポート
家政婦	Tさん	月・火・木・土・日	時間帯不明	日常生活面を主にサポート 2
	Iさん	水・木・金・土・日		

1：本来は9:00からだが、早めに来てくれている

2：柔軟に多様なサービスを提供しているようであり、詳しくは確認できなかった。

- ・朝食・昼食はヘルパーがつくる。夜はヘルパーが作っていたり、配達弁当を頼んだりしている。結構遅くまで起きている。
- ・2011年に要介護度5に上がった。障害者手帳1級を持っている。

図1 . F・Tさん宅2階図

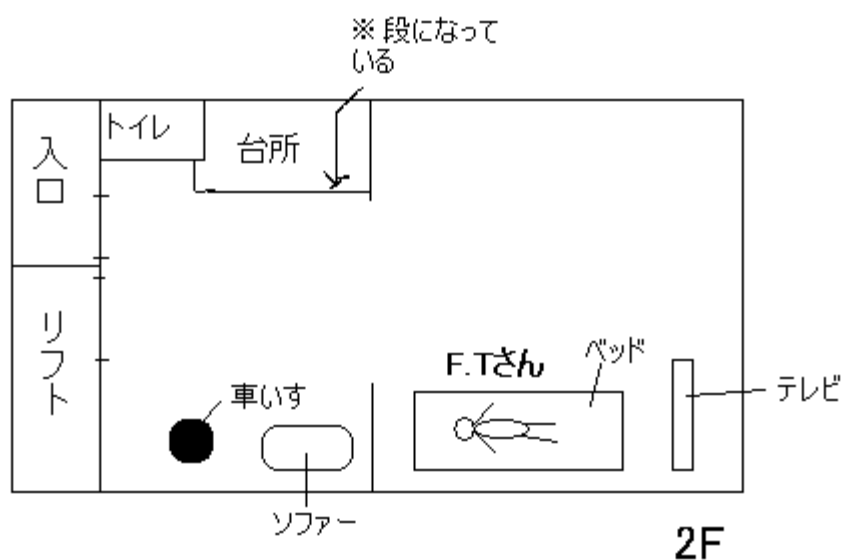
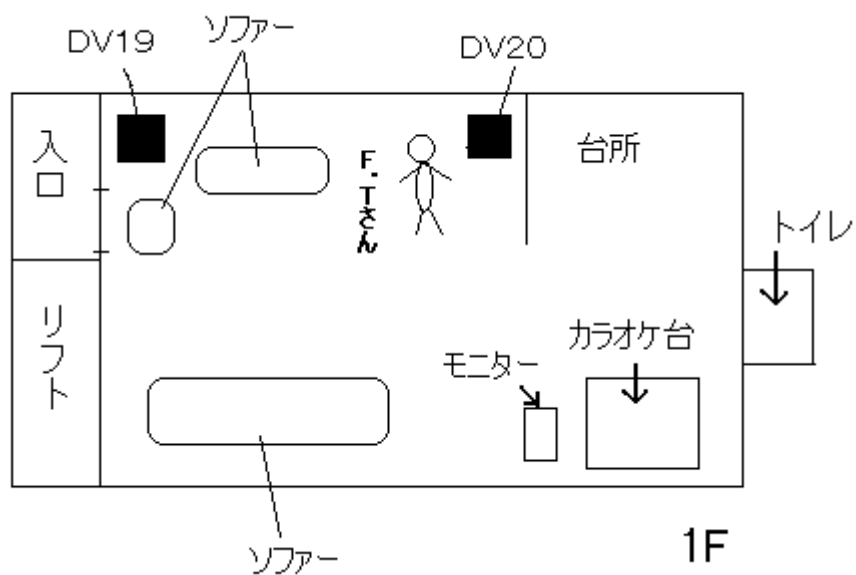


図2 . 8月5日調査カメラ位置



3. 調査の分析と考察

3 - 1 . 6月23日調査からの分析

日時：2011年6月23日(木) 14:53~

機材：ワイヤレスマイク1台

マイク付きビデオカメラ2台

撮影者：八木、小笠原

被撮影者：F・Tさん、Iさん、Tさん

<断片1：リフトを利用しベッドから車椅子に移乗する場面>

写真1は、F・Tさんが、車椅子に移乗するために、後方のリフトのサポートパッドにかかっていた体重を前方の家政婦Iさんの左手に移し替えているF・Tさんとそれに合わせてF・Tさんの背中のリフトのサポートパッドをIさんが右手で抜き取ろうとしている場面である。

DV21 Vol 1 2:56:03~2:56:13

DV22 Vol 1 2:57:18~2:57:28



(写真1：車椅子への移乗 DV21 2:56:12)

- 01 2:56:03 ((Iさんがリフトのベルトをはずす))
- 02 2:56:09 ((IさんがF・Tさんの前に左手を差し出す))
- 03 2:56:11 ((F・TさんがIさんの左腕付け根あたりに自分の左手を自ら動かして上体を車椅子から浮かす))
- 04 2:56:13 ((Iさんが右手でF・Tさんの背中にあるモノをとる))
- 05 2:56:15 I よいっしょ

3 - 1 - 1. 考察

この場面を見て特徴的なことは、リフトから車椅子に移動するときに関して、乗り移る当人(F・Tさん)とそれを支援する家政婦Iさん2人の行っている動作(Iさんの左手をつかむ動作など)が、ほとんど発話の助けを借りずに、あたかも、一人の行っている動作であるかのようなスムーズさで、滞りなく行われていることである。これは、サポートに入っているIさんのみでなく、当該の動作にかかわる、F・Tさんを含んだ2人ともが、この移乗作業を、同じ道具、同じ場所でもって習慣的に行い、それに慣れているからだと考えられる。とりわけ注目に値するのは、2:56:15(5行目)の、Iさんの「よいしょ」という発声である(この発話は、われわれにはIさんが行っているように見えたが確実ではない)。Iさんのこの発話は、リフトから車椅子への移乗を完遂するためには、必須のものであるようにみえる。というのも、この発話に、車椅子に最終的に着座するF・Tさんの動作が対応していたからである。興味深いのは、これ以前の動作には、発話が伴っていないにもかかわらず、この動作には発話が伴っていることである。この「よいしょ」という発話はF・Tさんへの体重移動の合図であると同時に、Iさんが力を抜く合図である、という二面性をもっているのではないかと考えられるが、なぜここだけ発話がされているのか。仮説的可能性は2つほど考えられる。まず、他の関連動作に比べてF・Tさんの動作とIさんの操作の動機をとる必要度が特別に高い可能性、ついで、この共同動作が、ひとまとまりの移乗動作の終着点をなしている可能性である。さらに興味深いのは、われわれが聞き取ったとおり、この発話「よいしょ」が、Iさんによってなれているのなら、それは、力を入れる動作の掛け声であるにもかかわらず、その当事者でないものによって発声されていることである。F・Tさんが力を入れる場面で、Iさんが「よいしょ」と発話するような形の連携がここで見られることは、リフトから車椅子への移乗動作が、たいへん高度な共同的行为として遂行されている証拠であると言える。実に興味深いシーンであった。

なおIさんがF・Tさんの上体を動かす動作は(写真1)、F・Tさんの背中のサポートパッドを抜き取る動作(写真1:2時56分11秒)から2~3秒で、終了しており、その間の動作の流れはとてなめらかである。このなめらかさ、スムーズさについて、以下少し考察しておきたい。たしかに、この間の一連の流れにはボディメカニクスのもの関わっていると考えられる。

ボディメカニクスとは、人間工学が発達したなかで、動作をどのようにすればエネルギーを無駄にせず、疲労を避けて効率よく作業できるかを表す語としてできたものである。(富澤 1997 109p)

つまり、ボディメカニクスとは看護場面や介護場面で出てくる考え方で、人間の身体の骨格系・筋肉系および器官の力学的相互関係をあらわし、被介護者の世話をするとき介護者にとって最小の動作で最大の効果をあげるようにするための考え方である(例:ベッド

から被介護者を起こす際に、臀部を支点にする起こし方をすることや、被介護者の両手をたたんで、体を小さくまとめるようなやり方)。写真1では、F・Tさんの背中部分にあるサポートパッド器具を取るためにF・TさんにIさんは体を寄せ、さらに左手をだし、その上で右手でサポートパッドを取っている。たしかにこういう動作をすることで、介護者としてのIさんは比較的腕力を使わずにF・Tさんに対する介護をすることに成功している。その一方で、そこでの連携動作は、単純に、介護者であるIさん自身テクニックとして構成されているわけではない。この連携動作は、Iさんの左手に体を遅滞なく預けるF・Tさんの振る舞いまで含めた共同的業務処理の体系があって成立しているものである。

ボディメカニクスは介護者の個人的工夫・テクニックとして記述されることが多いが、ここで我々が観察した共同的業務処理の連鎖的行為は、単純に個人的な工夫の連鎖ではなく、介護者と被介護者の高度の調整された連携的動作として構成されていた。そういう意味では、ボディメカニクスとは別物である、ということもできよう。

<断片 2 : 車椅子に乗った後の場面>

DV21 Vol 1 2:56:21~2:56:27



(写真 2 : F・Tさんの服を整える場面 DV21 2:56:27)

DV22 Vol 1 2:57:34~2:57:40



(写真 3 : 服装を整える場面 DV22 2:57:34)

- 01 2:56:21 ((リフトに関する全部の作業が終わる))
- 02 2:56:27 ((すわり心地が悪いのか、自らの意志により両手で車椅子のタイヤを押し
て上体を整える(服を直す)))

3 - 1 - 2 . 考察

写真2、写真3ではIさんが行うすべての動作が終わったときに、F・Tさんが服の違和感を訴え、IさんがF・Tさんの服を直している。この時、F・Tさんは服が直しやすいように両手を車椅子のホイールにあてて体を持ち上げ、状態を垂直にし、服を肩から重力にしたがって下向きにおろした状態にしている。その状態を前提に、Iさんは乱れた服を引っ張って整えている。

写真2、3では介護者の動きにあわせたものではなく、被介護者の動きにあわせた動作が、介護者によってなされているように見える。これはキネステティクスという考え方にあてはまっていると評価することもできるだろう。「介護する側」に焦点を当てているボディメカニクスとは対照的に、キネステティクスは「介護される側」に焦点を置いている。つまり被介護者自身の動きにあわせた動作を介護者が行うということである。

けれども、ここで、おきていることは、やはり、ボディメカニクスという言い方も、キネステティクスという言い方もいずれもぴったりではない。やはり、F・TさんとIさんの共同的業務処理という言い方がぴったりする行為だといえよう。F・TさんとIさんの両方が、共同的業務処理として、F・Tさんの服を直すという動作をしているのだ、という表現が一番適切のように思われるのである。ボディメカニクスやキネステティクスというような、結局は介護者からみた介護関係であるような諸用語は、被介護者の相互行為への参与をやはり限定的にとらえているように思われる。そのような用語が一見当てはまりそうな場所であっても、そこで起きている相互行為を詳細に見ることで、違った場面の成り立ちが見えてくるように思われた。

写真1～3を通してみると、F・TさんとIさんの一連の動作は介護者から被介護者に一方的に行われるような介護ではなく、介護者と被介護者が双方向的に共同作業を行っているといえるような介護になっているのではないだろうか。

<断片3：リフトに乗りこむ場面>

DV21 Vol1 2:58:00~

DV22 Vol1 2:59:06~



(写真4：リモコンを取り出す場面)

01 2:58:02 ((Iさんが車椅子の後ろにあるポケットからリモコンを探す))

02 2:58:11 ((リモコンを使ってシャッターを開ける))

03 2:58:16 ((リモコンを戻そうとする))

04 2:58:17 ((F・Tさんリフトに乗り込もうとする))

3 - 1 - 3 . 考察

写真4は、Iさんが車椅子の後ろの布製のポケットから、リフトのシャッターのリモコンを取り出す場面である。その後、リモコンを車椅子の後ろのポケットに仕舞おうとするのだが、F・Tさんが先にリフトに乗り込もう前方に移動としてしまい、Iさんが追いかける形になってしまっていた(3行目)。

これは対関係カテゴリー（専門家 - 素人，母 - 娘など）における議論と関連させて考えるならば、家政婦さんと被介護者という「介護者 - 被介護者」という対関係カテゴリーだけがレリバントな場面になっているのではなく、「雇用者(F・Tさん) - 被雇用者(Iさん)」という対関係カテゴリーもレリバントになっている場面だとも考えることができよう。なぜそのように考えられるのか。「介護者 被介護者」カテゴリー対だけが有意味(レリバント)なものと考えた場合、そのカテゴリー対が結び付いている活動としては、「電動車椅子による移動」が考えられるが、その活動だけでは、「車椅子の後を追いかけて、リモコンを背面のポケットに入れる」という活動が適切になるようには思われなからだ。

別の観点から考えてみる。この「車椅子の後を追いかけて、リモコンを背面のポケットに入れる」という活動は在宅で固有にみられる状況なのではないかとも考えられる。そもそも病院では、電動車椅子を利用している場面はあまり見られない。療養者が自主的に移動活動をすることが想定されてないのだろうか。とはいえ、電動車椅子の病院への持ち込みが、一般的に許されているかどうかに関しては患者の状況によっても思われるので、今後の調査に期待したい。

3 - 2 : 2011 年 8 月 5 日調査からの分析

日時 : 2011 年 8 月 5 日(金) 12 : 50 ~

機材 : ワイヤレスマイク 2 台

マイク付きビデオカメラ 2 台

撮影者 : 八木、小笠原(後に固定、 8 月 5 日調査カメラ位置 を参照)

被撮影者 : F・T さん、I さん、T さん、榎田実習メンバー 9 人

<断片 4 : F・T さんが机を動かす場面 >

DV19,vol4,1:13:04~DV19,vol4,1:13:20



(写真 5 : F・T さんが机を動かす場面)

01 F : ()ちよつと前えよれん

02 I : ここまでよってきとつたらどうにもならん

03 I : ° こんぐらいにしとき°

((I さんが机を前にだす))

04 I : こんぐらいでいける?

05 I : > () にぐらいにしとこかな < 待ってよ

3 - 2 - 1 . 考察

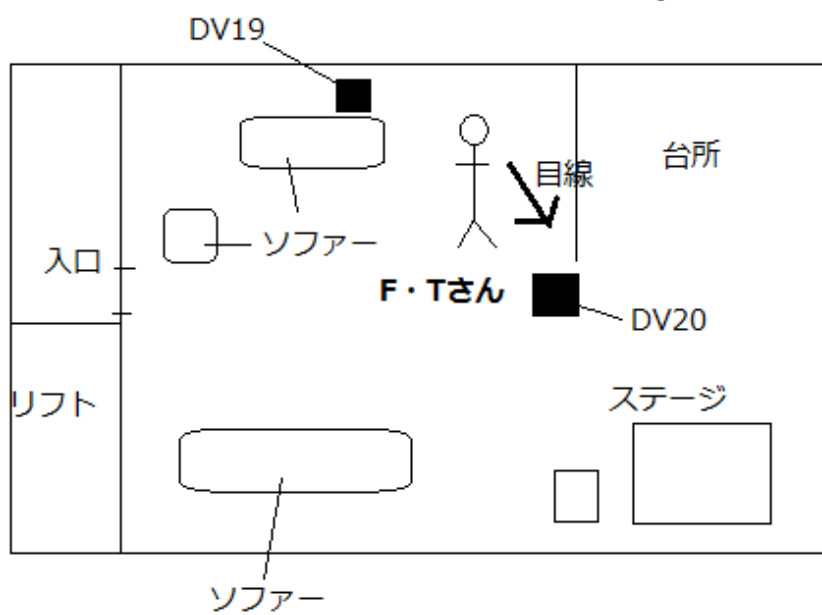
このF・Tさんが、机を前に動かすといった活動(3行目から4行目)は最初の一曲の歌唱が終わってから行われている活動である。この活動は、どのような状況と結びついているのだろうか。関連がありそうな事柄を検討するにあたって、F・Tさんとほぼ同じ目線で撮られたDV19の1:09:32の映像が役に立つ。その画像をチェックしてみると、F・Tさんから、カラオケをしている人が見え難い状況となっていることが分かる。

F・Tさんの行っている活動は、『電モク』(電子目次の略、転じて通信カラオケの操作盤のこと)の操作等であるが、その内容を考えたとき、モニター画面を見ているだけでは遂行しがたい活動であるといえる。つまり、歌の終了時の拍手だけならば室内各所のモニター画面を見ているだけで可能なのだが、『電モク』を用いてカラオケの音程の高さをコントロールする作業をしようとする、その作業を歌手が要求しているのかどうか、少し音程を操作した段階で、その操作が十分だったか判断して、さらに音程を変える必要があるかどうか、などを判断しなければならず、ステージの歌手の様子を直に見る必要があるように思われるのである。このような状況と結びついた活動として、このときの電動車椅子の前方への移動があったように思えた。



(写真6 : F・Tさんの視線がステージの歌手を見ることができているかどうか)

図3 . カメラ位置





(写真7：F・Tさんが電動車椅子を前方に移動させようとしている場面)

<断片5：電動車椅子を移動させている場面>

01: 1:33:18 ((F・Tさんが右手で車椅子のストッパーを外す))

02: 1:33:22 ((左手で左のストッパーを外す))

03: 1:33:25 ((両手で車椅子を操り、後方へ下がる))

04: 1:33:33 ((両手で机を自分の近くへ引き寄せる))



(写真 8 : カラオケ中に F・T さんが車椅子を動かす場面)

<断片 6 : F・T さんが机と電動車椅子を動かす場面>

01:1:36:59((F・T さんが右手で車いすの右側のストッパーを外す))

02:1:37:02((左手で左側のストッパーを外す))

03:1:37:04((両手を使い、車いすを前方に動かす))

04:1:37:07((右手で右側のストッパーを止める))

05:1:37:10((F・T さんの前方にある机をやや前に動かす))

06:1:37:13((右手で左側のストッパーを止める))

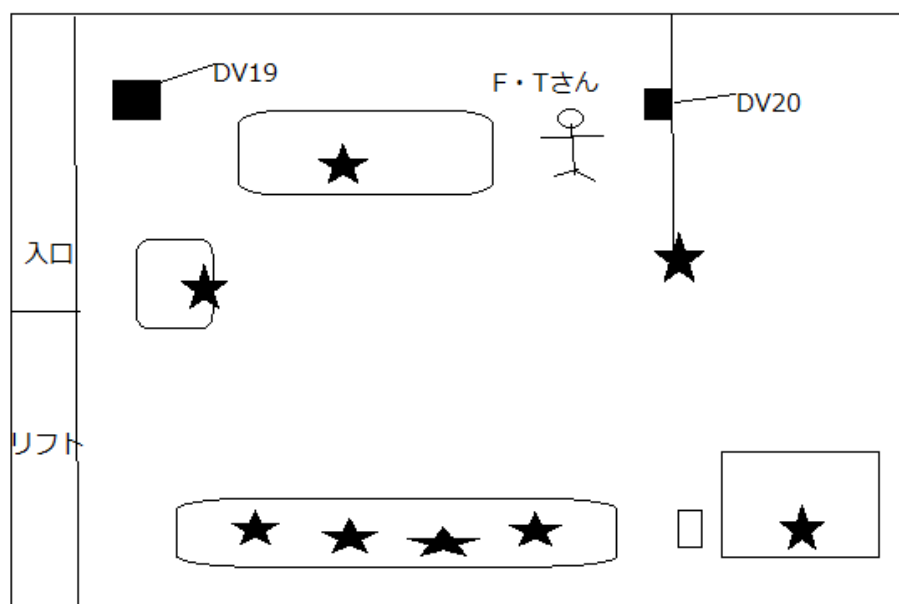
07:1:37:15((机を元の位置に戻す))

3 - 2 - 2 . 考察

1:33:18(断片5の1行目)や1:36:59(断片6の1行目)のように車いすを動かす場面がいくつか見られる。これはどのような状況と結びついた活動なのだろうか。我々は、後方に移動した断片5については、自分の机前のスペースを空けることによって、他のカラオケ参加者のステージと客席の間の移動が容易になるように意図された活動なのではないか、あるいは、左脇後ろの台上の通信カラオケ装置の液晶表示を見やすくすることで、次の曲が入っていることを確認しやくしたのではないか、などいろいろな可能性を考えたが、十分な相互行為的裏付けを得るには至らなかった。また、前方に移動した断片6に関しても、自分の机前のスペースが通路になる可能性が低いと承知したうえでの活動なのではないか、等の内容を検討したが、十分な確信には至らなかった。その上で感じたのは、目的はどうか、ここで比較的頻繁な車椅子の前後位置調節がF・Tさん本人自身の自発によって成し遂げられていることに注目すべきではないか、ということであった。すなわち、使い慣れている1階の部屋であっても、その場その場の微妙な状況の差異に合わせて自らの座る位置を細かく調節しつつ、その場における自分の最適な場所を探しているのではないかということである。少なくともこの場面ではF・Tさんにとって場所決めが大きな課題となっていること、その課題に合わせて自らの部屋内位置を細かく調節する活動を能動的にF・Tさん自身が行っていること、このことがカラオケルームの秩序現象として、記述されるべきであるように思われた。

<図4：1：33：15時点でのF・Tさん、学生7名、教授1名の場所見取図>

注記： ★は学生7名&教授1名の位置を表す。



そして、このように細かく場所取り調節を行うことによって、F・Tさんはこのカラオケ場面の適切な参加者になっていた。

なお、2011年9月11日および、2011年1月13日のデータセッションにおいて、参加者から指摘があったことを上記とは別様の可能性として、追記しておきたい。すなわち、F・Tさんが、車椅子を動かしているこれらの場面でなされていることに関して、以下のようにも考えられるのである。

第一に、車椅子に関する操作の全体が褥瘡予防として、体圧分散の習慣化された振る舞いの表れとして考えることもできるのではないかと、という意見が出された。脊椎損傷者は、臀部の痛覚を失っているため、同じ姿勢で座り続けることはなるべく避けなければならない（そもそもベッドで寝ている姿勢に比べて車椅子に座っている姿勢は、体重が分散されていないため、褥瘡リスクが高い）。それを防ぐためには、痛みの感覚に依存せずに、ことあるごとに体の位置を変えるなどして体にかかっている圧を再配置させなければいけない。このような要請が習慣化している表れとして、車椅子の頻繁な操作やその上でのF・Tさんの頻繁な体位変更を理解できるのではないかと、という意見がだされていた。一考に値する意見であると言うべきだろう。

もうひとつの可能性は、“マイクロフロー”の可能性である。もしかしたら、上で見たような車椅子の前後移動には、特段の環境適応的な意味などないかもしれない。細かく体を動かすことそのものに、自己刺激としての意味、自己の楽しみとしての意味がある可能性がある。すなわち、『楽しみの社会学』（著：M・チクセントミハイ，訳：今村浩明）（Csikszentmihalyi1975=2001）の中に記載がある、“マイクロフロー”という考え方が当てはまる事態なのではないかと、という指摘があった。つまり、車椅子に乗っているF・Tさんは車椅子に乗っていない人（たとえば貧乏ゆすりや、ペン回しをしている人）とは違う形（ここでは車いすを前後に動かすなど）でマイクロフロー活動を行っており、くつろぎを保っている可能性がある、と、指摘されたのである。傾聴に値する意見であるように思われた。



(写真9：F・Tさんが自分のマイクを取るシーン)

<断片7：F・Tさんがマイクを取るシーン>

01 3:08:58 ((車椅子を後方に下げてマイクの取れる位置まで下がる))

02 3:09:08((右手で自分の使うマイクを棚から取り出す))

03 3:09:15 ((もとの位置に車いすを戻す))

3 - 2 - 3 . 考察

この場面では、みんなに気づかれないようにマイクをとっている。これは、カラオケ会全体の雰囲気をもたさないように気を付けてとった行動だと考えられる。さらに、自分の歌う曲を入れる前にとった行動なので、自分の出番が近づいていることを自覚した行動ではないだろうか。



(写真10 : F・Tさんが曲を入れる場面 (F・Tさんのおしゃれな服にも注目))

<断片8 : F・Tさんが自分の曲を入れるシーン>

01 3:13:10 ((拍手が起こる))

02 3:13:20 ((家政婦さんの歌がかかるとペンを持ちデジモクにタッチする))

03 3:13:53 ((次にカラオケ上に流すべき自分の曲を検索入力し、自分に合わせたキーに設定する))

04 3:14:14 ((曲を入れ終わると前を向き、そのときに実際に流れている曲を口ずさむ))

3 - 2 - 4 . 考察

ここでは、家政婦さんが歌う曲の紹介と同時に拍手が起こるが、F・Tさんは拍手をしていない。そのあとすぐにペンを持って電モクをタッチしている。この場面以外では周りに合わせてF・Tさんも拍手しているので、ここでは曲を入れる準備のために拍手をしなかったのではないかと考えられる。

さらに、3:14:14(4行目)の動作は興味深い。次に歌う予定の自分の曲を、通信カラオケに入れ終わると前を向き曲を口ずさみ、それを周囲も異様な様子として扱わずに容認している、という緒行動の連鎖には、F・Tさんのこの場面への理解と周囲の他の観客のこの場面への理解の両方が埋め込まれているといえよう。ゴッフマンは『集まりの構造』の中で、

場面の中であるひとつの主要関与が指定されるかされないかは別として、社会的集まり 少なくともミドル・クラスの集まり 中にいる者は、その集まりから全面的に遊離している自己の姿を見せまいとして、少なくともある最少限の主要関与を維持しようとする。(Goffman, 1963=1980:56-57)

と述べているが、例えばそこで使われている「主要関与」という概念を利用するならば、このカラオケの「集まり」においては、「歌われている歌に関心を割り振る」という「主要関与」は一般的観客においてだけでなく、『電モク』を用いて入力するという管理側メンバーに所属すると思われるF・Tさんにおいても、かなりの程度「義務的関与」として理解されているようなのである。そのように参加者が等しく義務を共有するものとして、この場の参加の構造ができていたようなのである。

4. まとめ

この章全体の分析をとおして、どのようなことがわかったと言えるのだろうか。以下、箇条書きでまとめてみよう。

まず、リフトから車椅子への乗り移り場面の分析からわかることをまとめて置こう。この前半の分析からわかることは、第一に、要介護度5の身体障害者であっても、ルーティン化された生活場面においては、介護者と被介護者の共同的業務遂行が緻密に組み立てられたものとして実施されていることである。要介護度5であっても、一方的に介護者が、被介護者の身体を操作している訳ではない。そのことが確認できたことは、大きな発見だったと言えよう。また、その協調行動の際に、たとえば、被介護者の体重移動のかけ声(「よいしょ」)が、介護者によって発声されているというような、慣習化された振る舞いも観察されたが、このことは、二人の業務遂行がまさしく一体的なものとして遂行されていることを象徴的に表しているように思われた。

第二に、電動車椅子というものがもつ「自由さ」が露わに観察できたことも特筆すべきだろう。2階から1階におりるリフトのシャッターが上がってすぐに、そこに入っていくことは、リフトで降りるという活動が、介護者と被介護者の共同的業務処理であることを前提にすれば、被介護者の「勝手な振る舞い」というよりは、むしろ、被介護者から介護者への「率先して協力的な行動」ということができるだろうが、それが、介護者を置いてきぼりにするように見える状況を生み出して実践されていることを目の当たりみて、調査者としては、「あー、電動車椅子は被介護者を自由にするんだなあ」と思われた。自由に活動する中で、「率先して、介護者に協調する」という活動も、被介護者に選択可能になっているのである。このような、ときどきの、先行のし合いがあつてこそ、より高度な、つぎの協調行動が生み出されていくだろう、とも思われ、感慨深く思われた。すなわち、介護者が、決して置いてきぼりにされないような環境では決して組み立てられることのないような協働が、この在宅療養の現場では、実践されているように思われたのである。

ついで、1階でのカラオケシーンの分析からわかることをまとめて置こう。この後半の分析からわかることは、たとえ、要介護度5であっても、すくなくとも、それは、カラオケに参加するという状況においては、要介護者の、暮らしの中での対他者協調活動のレベルを自動的に引き下げるものではない、ということだ。場面のなかで、どのような場所を占めるか、は参与の枠組みを決める決定的に重要な要素であるけれども、たとえ、自分の2本の足で場所決めができない人間だったとしても、状況を理解しながら車椅子を前後に動かすことで、そのときの自分にとって適切な場所にみずから置くことが、被介護者にもできていた。また、(手のひらをぶつけ合うことが困難なので)実際には音のほとんどしない拍手であっても、F・Tさんは、適切な場面への関与の表示として、適切なタイミングで実施することができたし、そのような歌い手の活動への承認の合間合間には、つぎの曲の入力を、音程合わせという技術を伴わせながら実施していた。

我々は、在宅療養の現場はたしかに研究しているが、それと対比すれば興味深い結果が得られたかもしれない病院入院場面・施設入所場面の研究は行い得ていない。しかし、上記のような知見を位置づけるのに、仮説的に、他の場面（病院入院場面や施設入所場面）を想定することも、あながち無意味という訳ではないだろう。結局、在宅療養の現場では何が起きているのだろうか。猫を飼うことができること、「おしゃれ」してカラオケを楽しむことができること、これらのことが重要ではないとは言わない。在宅でなければ、それはできないことだ。けれども、我々の研究によって発見されたことは、そのようなことだけではない。自分が雇用主となって、同じ家政婦を21年間や7年間雇い続けること、必要な時には、2人同時に勤務してもらって、カラオケルームでのお茶だし等の接待をしてもらえること、そのような特別の長期的関係を結んだ家政婦と、高度に調整された連携的業務を遂行して、リフトから電動車椅子に移ったり、自動車に乗って買い物に行ったりすること。これらのこともまた、在宅でなければできなさそうなことであると言えよう。我田引水的にいえば、これらのことがらのうち、Seen but unnoticed(見えているが気づかれていない)ことがらが、ビデオエスノグラフィーの方法によって見いだされたのだと思う。そして、これは、インタビューのような他の質的方法ではなかなか見いだされにくい在宅療養の現場の特徴なのではないだろうか。この仮説的な結論をよりはっきりと確かめていくために、研究の継続を期待したい。

謝辞

被撮影者として撮影にご協力いただいたF・Tさん並びに家政婦のIさん、Tさんに深くお礼申し上げます。

その他、川島理恵さん（日本学術振興会・埼玉大学）、堀田裕子さん（中京大学）、西田厚子さん（京都橘大学）、家根明子さん（京都橘大学）、本調査報告書にむけてご助言ありがとうございました。

《参考文献》

Csikszentmihalyi, Mihaly , 1975 *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play* , San Francisco, Jossey-Bass = 2001 今村浩明訳, 『*楽しみの社会学*』新思
索社

Goffman , Erving 1963 *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of
Gatherings*, NY, Free Press = :丸木恵祐、本名信行訳『*集まりの構造 新しい日常行動論を
求めて (ゴッフマンの社会学 4)*』 誠信書房

富澤美幸「体位変換を通してボディメカニクスを考える 学生の実習レポートを分析して
」、1997/3、足利大学研究紀要第17号

(山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 1993)「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力：
車いす使用者 のエスノメソドロジ的研究」『*社会学評論*』44(1)：30-45